死の風景を想像／創造する作家としてのStephen Crane

―19世紀末米国における死（視）とツーリズム（リスト）―

増　崎　　恒

The Dead in Fin-de-Siècle America:

Stephen Crane Seen in the Discourse of Burial, Cremation, and Tourism/ist

Ko MASUZAKI

は　じ　め　に

If those old Bourbons take that dummy for me, they'll be a little startled when they find out that I'm alive — and kicking!（"A'Bogus'Cremation"）

CLOCK, *n*. A machine of great moral value to man, allaying his concern for the future by reminding him what a lot of time remains to him.（Bierce 36）

FUNERAL, *n*. A pageant whereby we attest our respect for the dead by enriching the undertaker, and strengthen our grief by an expenditure that deepens our groans and doubles our tears.（92）

IMMIGRANT, *n*. An unenlightened person who thinks one country better than another.（117）

米文学作家 Stephen Crane（1871-1900）は滞在中の欧州で病死し、米国内の家族墓所に葬られる（Wertheim & Sorrentino, *Log* 363）。作家（の身体）は帰国して「埋葬（＝土葬）」される。当時の葬送と死の風景の規範に従う。遡ること 10 数年前、1880 年代の米国でこれらの言表は創出される。（完全に）死んだ筈の「私」が実は「生きて」いると知らされて「保守派の政治家たち」（old Bourbons）は驚愕する。「私」による語り（騙り）が一幅の風刺画に集約される。画中、「私」の身代わりとなって炉で「火葬」に付される「ダミーの人形」が火葬後の「（遺）灰」を入れるための「骨壺」と一緒に焦点化される。人生の残り時間（の多さ）を示し、「（死が待ち受ける）未

来への不安」を「緩和」する「時計」の役割が期待される。生を謳歌する人々の目を楽しませる「見世物」（pageant）的な側面を「（死者を送る）葬式」は兼ねる。「無教養」（unenlightened）な「移民」集団が米国に入り込む。一連の言表は、当時の米国が抱える多様性を背景に、政治家から移民まで境遇を問わず万人を待ち受ける「死」を結局のところ前景化し、「教養」のある中産階級米国人に向けて発信される。死の対極にある「生」に固執する、彼らの不安交じりの関心に直結する。Crane もまた、この心情に通じていたに相違ない。1880 年代、実兄は米国の複数の「新聞社」にニュース記事を配信する。彼を手伝い米国社会の現実をジャーナリストの目で見る。これが職業作家 Crane 誕生の基点となる。「死」に対する意識は作家に最初期から根付いている。1890 年代に入り、米国の南北戦争（1861-65）を題材に兵卒 Henry Fleming の活躍を描く中編小説 *The Red Badge of Courage: An Episode of the American Civil War*（以下、*RB* と表記）を、1895 年に作家は発表する。“The book sold widely that comment upon it now is little short of gratuitous.”、と作品の好調な売れ行きによって作家としての名声を確立する。作品の反響は *RB* における「英雄」性を巡る議論を引き起こす。作家は同一人を主人公に据える、*RB* の後日譚にして続編とも呼ぶべき短編“The Veteran”（以下“Veteran”と表記）を翌年に雑誌掲載する。本作品にその回答が示されているとされた（Knapp 168; Solomon 76, 97-98）。老齢に差し掛かった Fleming が田舎で退役生活を送っている。燃え盛る家畜小屋から家畜を救出する途上、彼は焼死する。その最期は、“Henry Fleming could not be much older than fifty years. It was cruel to kill him so early and so vulgarly.”、と当時の書評によって批判的に受け止められる（6: 86; Weatherford 191）。[1)]

老 Fleming の「死」は英雄論争と併行し、作中で想定される彼の年齢に基づく人間の寿命の妥当性から論議される。*RB* の高評価と対照的に、“Veteran”は *RB* の蛇足とみなされる。従来の研究では、“Veteran”それ自体に一定の評価は与えられない。作品の細部を掘り下げる研究は皆無に近い。小論では、作品が呈示する「火事による焼死」に埋め込まれた社会文化的な意味を、先の風刺画が主題とする「火葬」、及び作家の身体が最終的に到達する「土葬」と関連付ける。「時計」、「葬式」、「移民」をも議論の射程に入れて作品を再評価する。

1893 年に私家版として出た第一作 *Maggie: A Girl of the Streets*（以下、*M* と表記）は、作品が発表された当時のニューヨーク市中（のスラム街）を舞台にする。*RB* と *M* の連続性、作家の他作品との相関性、と絡めて“Veteran”を再考する。この作業の中で 19 世紀末米国の死の諸風景の持つ意味を再検証する。その際、葬式（の先に続く死者への処置）を見世物（＝視覚の対象）に置換する思考様式に着目する。非日常的な体験を希求する、当時の米国社会における観光行動（＝ツーリズム）熱と交差させ議論を深化させる。「死ぬ／視る」という死（視）の力学の中で、「死」（death）の図像は「死者」（body, corpse）を通して直接的に喚起される。また、「墓（所）」（cemetery, grave, graveyard, tomb）越しに間接的に想起される。死の風景はツーリズム（リスト）向けの＜死（視）の風景＞に転じられる。ツーリズムの枠組みは観光する主体（＝ツーリスト）

による他者（＝観光対象）支配の構図を前提とし、ツーリストの優越性が担保された「権力」関係を導く。Crane（の作品と身体）はこの図式に参与したと仮定する。考察の重心は、発展著しい当時のニューヨーク市に置かれる。従来看過されて来たCraneによる諸作品を斬新に組み合わせる。米国全体に敷衍させ、死（視）、火葬／土葬を巡る当時の言説、Crane（の作品と身体）、三者の相関性を探る。この文脈から、作家が死の風景を想像／創造する際の原動力の本質を示し、本仮説の立証を試みる。[2)]

1. 19世紀末米国の社会文化状況とツーリズム（リスト）を取り巻く死の風景

Craneの同時代人、米国のジャーナリストJacob A. Riisは19世紀末のニューヨーク市中のスラム街を取材する。1890年の著作*How the Other Half Lives*の中で、“The fire had swept up with sudden fury from a restaurant on the street floor, cutting off escape. Men and women threw themselves from the windows, or were carried down senseless by the firemen. Thirteen half-clad, apparently lifeless bodies were laid on the floor of an adjoining coal office, and the ambulance surgeons worked over them with sleeves rolled up to the elbows. A half-grown girl with a baby in her arms walked about among the dead and dying with a stunned, vacant look, singing in a low, scared voice to the child.”、と彼は死の風景を切り取る（114）。「火（事）」（fire）に巻かれてスラム街の住人たちが落命する、あるいは息を引き取る直前の様子が活写される。CraneはRiis（の著作）から影響を受けたとされる（Gullason 499-500）。類似する死の風景を作家は、同時代の（Riisを含む）数多の著者による著作を通じ、同市のスラム街の外側から、野次馬的な読み手の欲求を充足させる＜非日常の光景＞として見て取ったに相違ない。同じ時代のヨーロッパの都市と同じく、米国（の同市）もまた、「死に淀み切った文化相」の中で「ネクロポリス（大墓地）」の風景として生者によって俯瞰される（高山282）。[3)] この視線は対象を非日常化、他者化するツーリストの立場に通底する（アーリ＆ラースン7）。ツーリズム（リスト）の文脈内で作家は理解され得る。

当時のニューヨーク市中のスラム街には悪名高い「共同住宅」（tenement）が建ち並ぶ。それを火元とする火事が多発し、しばしば死傷者を出した。Riisはこの建造物を、“[Tenements in New York City]are the hot-beds of the epidemics that carry death to rich and poor alike [. . .].”、と表現する（3）。スラム街の代名詞的な共同住宅を介し、火事が象徴する「火」、及び「伝染病」（epidemics）がもたらす「死」の風景が、「スラム街＝混沌」という等式と共に、その外部に位置する読者（＝ツーリスト）の前に現出する。「火」、「（伝染）病」、「死」、の三者の連環にツーリストとしてCraneもまた組み入れられていたと見る。具体的にCrane作品の分析に入る前に、この構造を議論の足掛かりに、ツーリズム（リスト）を取り巻く死の風景が生成される過程を、19世紀末米国における社会文化状況から概観する。

1893 年、イタリアの航海者 Christopher Columbus による＜アメリカ大陸発見＞ 400 周年を記念する万国博覧会がシカゴで開催されて全米が熱狂する。19 世紀末米国を彩る祭典に等しいこの万博は当時の米国の社会文化状況を包括的に代弁していた、と考えられる。この前提に立ち、万博を眺め返す。1892 年に雑誌掲載された記事は、Columbus の歴史的な＜発見＞に米国の起点を見る。米国の「文明」と「教養」の「進歩」の到達点として万博を位置付け、中産階級米国人を万博と同等視して賞賛する（Davis 306, 308）。この裏には、米国社会に同時期に＜新規参入＞した「移民」を牽制する意図が見え隠れする。1880 年代から 90 年代にかけて、万博の謳い文句とは真逆の「低い文明水準」、「無教養」の集団と移民たちは中産階級米国人から蔑まれる（Bierce 117; Mayo-Smith 133）。彼らは都市部に定住してスラム街を形成する。その代表格、ニューヨーク市中のスラム街は「伝染病の温床」という悪名を全米中に轟かせる（Riis 3）。「（19 世紀を象徴する伝染病である）コレラ」は移民が広めている、この病がもたらす＜文明人＞にそぐわない＜不名誉な死＞にいつ何時であれ＜無秩序＞に襲われ得る、と信じ込んだ中産階級米国人の間に不安が広がる。爆発的にコレラが流行する中、万博の開催は強行される。万博そのものが瓦解する危機に瀕する。移民の埒内にコレラを含めた諸々の病を囲い込む。移民とセットにして他者化する。一線を画し彼我の距離を保つ。こうして、その無害化を諮る。万博の開催の裏で同時進行的に、一連の思考様式が形成される。それを支え、中産階級米国人の優越性に転化する時代風潮に、「火（事）」が微妙に異なる位相で帯同する点は看過し難い。[4)]

1893 年の雑誌記事は「公衆衛生」という観点から、万博の開催に合わせた「ゴミ処理」用の「焼却炉」（cremator）の会場内への新規設置、及びその処理「速度」（speed）の先進性、を謳う。合わせて、人間以外のモノ、例えば「獣」の骸等が焼却された実績を伝える（Morse 316）。「コレラ」等、非人間的な＜モノ＞としての＜汚物＞を焼却処理し完全に一掃する企図が透ける。この意味では、万博が標榜する「文明」性と「焼却＝火」は同一線上に位置する。この文脈から、火葬／土葬を巡る当時の言説の真意を読み直す。万博開催の前の年、雑誌に米国の保健衛生官が記事を寄稿する。移民を感染源とする、伝染病全般に対峙するニューヨーク市の「検疫所」の「防衛線」（line of defence）としての機能を強調する。記事は、ニューヨーク湾内の小島、「スウィンバーン島」（Swinburne Island）の検疫所を取り上げる。1889 年、島内の検疫病院の隣に火葬炉が建造される。検疫時に発病が確認され、隔離後に病死した移民は速やかに「火葬」（cremated）された（Jenkins 585, 587, 591; Prothero 57）。「（防衛）線」によって区切られ、＜線引き＞が火葬越しに完遂される。一方、検疫を通過した移民は（コレラの隠れ保菌者等と共に）米国社会に紛れる。“A map of the city, colored to designate nationalities, would show more stripes than on the skin of a zebra, and more colors than any rainbow.”、と形容される移民の集団が同市のスラム街を彩る（Riis 25）。合わせて、コレラが散発的に都市部で流行する。

同時期の雑誌記事は、同市のビジネス界で成功する「紳士」（a gentleman）に共通する「時間厳守」

の精神を前提に、当時の米国社会に浸透しつつある「時間管理」を徹底した労働環境、それに伴う＜文明＞的な「秩序」（order）と「節約」（saving）の現出、を列挙する（“Employés' Time Recorder”171; “Punctuality”46）。時間使用の実態に価値が見出される。速度（＝時間の節約）と仕事効率の両立は、（米国の文明の尺度を示す）万博会場で稼働し続ける新型の焼却炉、それと象徴的に重なる火葬炉、を想起させる。速度は効率性と共に、速さ（と目新しさ）に対する不安交じりの関心を中産階級米国人の間に呼び起こす。時計の針の運行は、避けられない未来の「死」を明示すると同時に、それを隠す役割を負う（Bierce 36）。1890 年代の米国において、火葬の実施件数は土葬に比して著しく低いとされる（Rosen 75-77）。ところが、風刺画は火葬の場面を意図的に題材に選ぶ。火葬の視覚イメージが当時の社会に確実に浸透していた事実を示唆する。

万博を間に挟む 1880 年代から 90 年代の前半にかけて、米国では「新聞」、「雑誌」、「著作」で読者の関心の高さを反映するかのように火葬特集が次々と組まれる。雑誌の 1 つは、「火葬炉」（the cremation furnace）の使用が“[I]ts occasional use attracted considerable newspaper attention.”、と「新聞」の関心を引いていた＜事実＞に触れる。そして、「炉」（furnace）の構造が詳細に説明される（“The Cremation at Lancaster, Pa.”136）。更に、別の著作は、“Parts of the following pages have been already published in New York daily papers. The writer responds to urgent requests by republishing them in this form.”、と「ニューヨークの日刊新聞」に既発表の記事を「再録」する形で刊行される。一連の著作は、「野蛮」、「下品」、「異教徒的」、「（キリスト教の）聖書の教義に反する」という偏見によって火葬実施が妨げられている実状、これらの偏見（及び、それを増長させている土葬支持者）との「戦闘」（battle）に勝利する必要性、を訴える（Cobb 5, 161; *Cremation by an Eyewitness* 2, 11, 12, 13, 14）。著作は同時に、それらの偏見の中身は土葬にこそ該当すると論説する。土葬を「嫌悪を覚える慣習」、「（非文明性を象徴する）コレラの蔓延原因」、と断罪する。その上で、火葬を「文明」（civilization）、「進歩」（progress）と等価視する。この文脈で火葬推進を肯定する。別の著作は、“Cremation is opposed by custom and prejudice. It is supported by economy, hygiene, and sentiment.”、と慣例と偏見が火葬の実施を妨げているだけで、「経済」的、「衛生」的、「感情」的な理由において火葬は大衆からの支持を獲得していると断言する（Cobb v, vi, 151; Henderson 5）。

“When Columbus landed here 400 years ago, some of our Indian tribes were practising cremation in a rude fashion [. . .].”、と万博の掲げる理念を象徴する Columbus は「火葬」を先住民の「野蛮さ」と等号で繋ぐ（“Practical Hints”1）。Columbus の名と共に礼賛される 19 世紀末米国の文明の高さという文脈の中で、火葬と土葬は相反する＜別物＞ではない。位置を入れ替え相互に絡み合う。万博が表徴する「文明国家＝米国」の進歩発展と歩を合わせ、新旧勢力がせめぎ合う中で旧来的な土葬の権威を補完する新規の葬送手段として死の風景に溶け込む。当時の中産階級米国人の意識下に火葬は（その文明性に関する是々非々の論議の渦中で）着実に刷り込まれていたと思われる。万博が開催された年、「現代文明」（modern civilization）に則った、「紳士」（gentlemen）と「淑

女」（ladies）に相応しい教養を読者に示す礼儀作法本がニューヨークとシカゴ双方で刊行される。「葬式」（funeral）に関連して「土葬」の説明が入る一方、火葬については全く触れられない。同時代の記事や著作から浮かび上がる時代精神を踏まえるならば、この「不在」は却って、既存の礼儀作法に火葬が組み込まれる途上にあった、それ故に（ニューヨーク、及びシカゴ在住の）中産階級米国人の関心の一部を火葬が占めて土葬と一括りにして「葬式」という枠内でそれが認識された、可能性を仄めかす。これを裏付けるかのように、翌 1894 年の雑誌記事は、「火葬」を前提とした葬式の形を控え目ながら提言している（Houghton et al. 13, 15-17, 351-56; “Mind Your Own Business” 13）。

葬式に関連して、1881 年、ニューヨーク市周辺の墓（所）情報を網羅した「案内書」（guide）が刊行される。序文で、（土地不足により）マンハッタン島での土葬は全面禁止、と当時の実情が記される（*The Cemeteries of New York* 2）。火葬は言及されないが、土地の飽和状態に伴う土葬の限界（その代替になり得る火葬）が示唆される。1890 年代の火葬／土葬を巡る論争に繋がり得るこの案内書を好例として、墓（所）には 19 世紀末近辺を生きる中産階級米国人のツーリズム（リスト）的な視線が向けられる。例えば、1906 年の観光案内本はツーリストに人気の名所として、マンハッタン島に位置する Ulysses Grant 元米国大統領の「墓（所）」（tomb）を挙げる（Wilson 91）。移民が生活を営む市中のスラム街も、19 世紀末米国のツーリズム（リスト）の文脈で同等に扱われる。Riis の著作の中で、“five baby funerals”、“[t]he habit of expensive funerals”、“the funeral coach”、“a ludicrous funeral parade”、“funeral expenses”、“a big funeral”、“the style of the funeral”、と多様な「葬式」の記述と共に市中のスラム街は呈示される。喚起される死の図像を補完するかのように、“[T]he big barracks are like fiery furnaces [. . .].”、とスラム街の「粗末な小屋」は夏場の酷暑の中、「（火葬）炉」（furnace）の比喩で語られる。一方で、「貧困者用の共同墓所」（Potter’s Field）に死者が「土葬」される手順が挿絵付きで逐一示される（62, 166, 177-78, 189, 221, 258）。一連の記述に中産階級米国人の視線が重なる。

ニューヨーク市中の移民は「他者」（the other half）と位置付けられる。Riis の読者（＝中産階級米国人）から隔離される。この延長上で、（移民が感染源であると信じられた）伝染病の不安を排除し、中産階級米国人（＝米国の担い手）の優越性を誇示する「展示」空間が万博会場を席巻する。来場者（＝中産階級米国人）はそれを「世界観光の一種のミニ版」、ツーリズム（リスト）の祭典、としても受容する（Riis 1; アーリ＆ラースン 207）。万博会場を構成する娯楽施設ミッドウェイ・プレザンスの一隅では「エジプト学の展示」（Egyptological Exhibit）が催され、「ミイラ」（mummies）が客を呼ぶ見世物になる（Don’t Fail to Visit the Egyptological Exhibit）。1897 年に米国で刊行された著作は冒頭部で、“Lands that have made or witnessed history possess peculiar fascination [⋯]. Egypt in these respects is unsurpassed.”、とエジプトを描出する（Stoddard 5）。エジプトは当時の米国社会における「魅惑的な異国」（fascination）になっていた。エジプト（＝非日常空間）

とミイラ（＝土葬）のイメージ連鎖を通して、ツーリズム（リスト）の文脈付きの死の風景を万博は提供する。一方で、会場内で稼働する焼却炉は火葬の実施を暗示する。万博開催の年、万博公式ガイド本の著者によってシカゴ市の「標準」ガイド本が刊行される。会場周辺の地理情報として、隣接する Oakwoods Cemetery が挙げられる。万博と墓（所）が並置される（Flinn xi, 60）。

万博（＝新奇な事物の展示、米国建国に携わった古参の中産階級米国人の優越性の誇示）を軸に、移民（＝米国社会への新規参入者）、死の風景（＝火葬／土葬の新旧せめぎ合い）、19 世紀末ニューヨーク市（＝スラム街の新規形成、火葬炉の新設）、が錯綜する。新旧のベクトルが混在する。それを「秩序」化された時間のサイクルとツーリズム（リスト）の目が包み込む。作家は万博開催の期間中に、後に自身の出世作になる *RB* を書き始める（Wertheim & Sorrentino *Log*, 91）。作中で展開される物語はこの社会文化状況の影響を受けていたと推測される。これを踏まえ、作家が発信する死の風景の再解釈を試みる。万博が開催された年に発表された私家版 *M* を中心に、同時期の作家の諸作品における死（視）の構造に着目し、同市に相対する作家の＜まなざし＞について検討する。

2. Crane 作品における死の風景の見せ方

Crane は 19 世紀末のニューヨーク市中（のスラム街）を、Riis の著作と同様に、「死」の風景を交ぜて描き出す。作家の筆致は Riis からの影響を色濃く映し出す。加えて、無関係そうな 1896 年 1 月の作家の複数の伝記的事項、その交錯が深く関与していると見る。＜死＝同時代ニューヨーク市＞とみなす等式が作家内部で生成される。“For my own part, I am minded to die in my thirty-fifth year.”、“I will be glad if I can feel on my death-bed that my life has been just and kind according to my ability [. . .].”、“[*M*] never really got on the market [. . .].”、と作家は手紙の中で記す。35 歳までには「死にたい」と死への願望を口にし、「死（の床）」に臥す自己像を夢想する一方で、私家版 *M* の商業的な失敗に固執する。「改訂版」出版に係る合意がニューヨーク市を拠点とする Appleton 社と交わされる（Wertheim & Sorrentino *Log*, 160, 162-63）。*M* の中で相次ぐ死は、手紙が表明する作家の死生観と連動すると捉えても的外れではない。これを議論の前提として同作品における死の風景に着眼する。

作品は、19 世紀末ニューヨーク市中のスラム街に暮らす移民の子女 Maggie に光を当てる。彼女の人生の転落を、「雑多な国籍」（nationalities）背景を有する移民たちがスラム街で直面する現実に重ね合わせる（1: 30）。死のイメージが随所に散りばめられる。私家版に添えられた献呈文は、スラム街の劣悪な環境を牛耳る「（正体不明の）強大な力」（a tremendous thing）に寄せる作家の関心の高さを伝える（Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 53）。よって、現前化する死は、作家のこの関心と、ある程度は連動していると思われる。

Maggie の母親の身体を、“She shrouded herself, puffing and snorting, in a cloud of steam at the stove [. . .].”、とストーブから昇る蒸気が包む様子は前後の脈絡無しに「死装束を着けた状態」（shrouded）に近似する。Maggie の弟 Tommie の死は、“The babe, Tommie, died. He went away in a white, insignificant coffin, his small waxen hand clutching a flower that the girl, Maggie, had stolen from an Italian.”、と何の前触れも無しに唐突に呈示される。死の事実が、作中、この箇所でのみ用いられる「柩」（coffin）という語と共に強調される。一方、死者への処置等の実手続きは抜け落ちている。Maggie の死後、隣人たちが母親の許を訪れ、“ ‘She’s gone where her sins will be judged,’ cried the other women, like a choir at a funeral.”、と弔意を述べる。「葬式」（funeral）は比喩形象の一部として登場し、Maggie の葬式に係る実手続きは省かれる。加えて、彼女の死亡時の状況、遺体の説明はいずれも作品から欠落している。“Mag’s dead.”、と近所の住人が一言知らせるだけである（1: 14, 20, 75, 76）。*M* における「死」の風景には違和感を覚えざるを得ない。死の＜不自然＞な描写に被せて、スラム街の住人の生活空間の中に「時計」を作家は反復的に持ち込む。“A clock, in a splintered and battered oblong box of varnished wood, she suddenly regarded as an abomination. She noted that it ticked raspingly.”、と「時計」（clock）の針の動きに対する Maggie の嫌悪感が前景化される。また、“ ‘Do keep still, Freddie! You talk like a clock,’said the woman to him.”、と私家版では「猿のように喋る」（gibber like an ape）と相手に向けられた蔑み表現が、改訂版では「時計の針が立てる音のように喋る」（talk like a clock）に書き換えられる（1: 28, 59）。

不自然さを伴い、死と時計が作家の描くスラム街には同居する。作家は私家版の刊行と同時期に、スラム街で暮らす移民の（George と彼の母親から成る）母子家庭を描く、*M* の続編 *George's Mother*（以下、*GM* と表記）を書き始める。それは *M* 改訂版が出版された後に刊行される（Wertheim & Sorrentino, *Log* 84, 88）。とすれば、両作品の連続性に着目することで、この不自然さの正体が見出せる筈である。“Father’s dead, ain’t ’ee? Yeh don’t say so? Fell off a scaffoldin’, didn’t’ee? I heard it somewheres.”、と George の父親の死が会話の中で語られる。「（建築現場での作業中に足場から落下した）事故」が死因として仄めかされるが、仔細は一切不明である。また、彼の葬式等の実手続きはまたしても不在である。同じ会話の中で続けて、彼の 4 人の兄の「死」が話題に上る。父親と同じく、死の事実のみが語られる。彼は母親に「教会」（chapel）に誘われるが拒絶する。“She resembled a limited funeral procession.”、と彼女の姿は「葬式」（funeral）の参列者の雰囲気を帯びる（1: 117, 125, 156）。葬式は教会と対になり、比喩形象の中に現れる。彼女の死は “The little old woman was dead.”、と呈示されるものの、その先に当然続くべき死者に関する実手続きは他の登場人物の場合と同様に語られない。他方、“The little swaggering clock on the mantel became suddenly evident, ticking with loud monotony.”、と George の私的空間を時計の＜存在感＞が圧倒する（1: 160, 178）。意図的に前後を削ぎ落とし、「死」それ自体が前景化される。その外縁を「時計」が取り巻く。

時計が当時担った役割を当てはめて、この構造に潜む意味を理解する。時計は中産階級米国人に死を意識させる一方で、死の不安から彼らを遠ざける（Bierce 36）。*M* の中で、Tommie の死が記述された直後に「英国人紳士たち」（English gentlemen）が比喩的に出現する。彼らは改訂版では「英国人ツーリストたち」（English tourists）に書き換えられる（1: 20, 84）。「紳士」が表徴する＜優越＞属性、「（米国に滞在している）英国人」が暗示する＜他者＞属性、を備えたこの「ツーリスト」にとって Tommie の死は＜他人事＞に過ぎない。スラム街で起こった「死」を部外者の優越的な立場から眺める、ツーリズム（リスト）的な枠組みが露呈される（アーリ＆ラースン 7）。作家は 1896 年の手紙の中で、“I had no other purpose in writing ‘Maggie’ than to show people to people as they seem to me.”、と書き記す（Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 671）。*M*（と続編 *GM*）は「中産階級米国人＝他者＝観察者」にスラム街の実態、そこで展開される死を「見せる」作家の意図を体現する。時計はスラム街に溶け込む。この意図に準じ、死に対する不安交じりの関心を読者と共有しつつ不安部分を巧みに隠蔽する。＜規則的＞に反復前進する時計の針の「チクタク音」（ticking）は文明的な時間の流れを管理する、それを通して混沌状態の再秩序化を企む作家の身振りと解される。George は時計が告げる出社時間に従わない。＜時間通り＞に行動しない。時間による管理からの＜逸脱者＞として、彼は「職を失う」（fired）羽目になる（1: 168）。時間（時計）を巡る George の「解雇」劇はその裏で、スラム街の無秩序を表徴する Maggie、彼女の時計嫌悪と連動しながら、作家の時間意識を反映する。一連の「死の風景」と関連付け、時間、土葬／火葬と絡めて作家を再度見通す。補助線として、*M* 私家版と改定版の狭間に発表された複数の Crane 作品を取り上げる。

1894 年、作家の実地体験に基づくニューヨーク市中のスラム街探訪記が新聞掲載される。（作家自身と思しき）記事の語り手は自らを「よそ者」（stranger）と位置付けてスラム街の光景を他者化する。スラム街の安宿は、“With the curious lockers standing all about like tomb stones there was a strange effect of a graveyard, where bodies were merely flung.”、“[I]t seemed that he and this corpse-like being were exchanging a prolonged stare and that the other threatened with his eyes.”、と「死者」（bodies, corpse-like being）が横たわる、墓石（tomb stones）が林立する「墓（所）」（a graveyard）、に喩えられる（8: 286, 287-88）。同じ年、同じ新聞に掲載された別の記事で、作家は同市近郊の海辺のリゾート、コニーアイランドの閑散期を取り上げる。（作家自身と思しき）語り手が「よそ者」（stranger）に取材する形を取る。第三者的な視点でコニーアイランドは語られる。その際、“The sun, meanwhile, was muffled in the clouds back of Staten Island and the Narrows. [. . .]A view of the sea, to be caught between two of the houses, showed it to be of a pale, shimmering green.”、と海（の彼方）を意識する描写が挿入される。また、ポップコーン販売員の陰気な声の調子は「死を悼む讃美歌」（death hymn）として耳に残る（8: 323, 325）。「スタテン島」（Staten Island）、「海峡」（Narrows）、「海」（sea）が組み合わさる。コニーアイランドとスタテン島を挟む海峡にスウィンバーン島

は位置する。当時、同島の火葬炉で火葬が実施されていた。記事は他方、“[T]he crowded little thoroughfares resemble the eternal ‘Street Scene in Cairo.’”、とコニーアイランドの繁忙期を、エジプトの「カイロ」（Cairo）になぞらえる（8: 325）。前年の万博で、エジプトは土葬を象徴するミイラのイメージで語られた。[5] 死を悼む讃美歌の調べにのせて、火葬と土葬双方を意識する作家の姿が間接的に見え隠れする。これらの記事が書かれた翌年、海辺のリゾートでの若者たちの駆け落ちを描く作家による短編が新聞掲載される。恋人と駆け落ちする娘の父親 John Stimson を「老人」（an old man）とし、駆け落ちする当事者（= Stimson の娘を含む若者たち）によって持ち込まれる＜新局面＞、「若さの速度」（youth's pace）と対置させる。古い世代を代表する Stimson は時代の変化のスピードの速さ（を具象化する自分の娘）に追い付けない、その速さに圧倒される（8: 12）。Stimson には“son of Stephen”という意味が含意される（Reaney 428）。とすれば、彼の姓は誇張される新旧対照と共に、「老い（とその先に待ち構える死）」、「同時代の時間の流れの速さ（が生み出す逸脱性と混沌状態）」に対する作家自身の見識の投影図、と理解できる。

GM の George の母親は、「老い」という属性で Stimson と並べられ得る。彼女は「老婦人」（old woman）と表される（1: 119）。物語が展開する中で、この老婦人は想定通りの死に至る。これは Stimson が到達する精神的な「死」の境遇に繋がる。*GM* に接続する *M* の物語、及び（火葬／土葬を巡る）死者への処置を意識させる 1894 年のスラム街探訪記事とリゾート取材記事にもまた通底する。同時期、1894 年から 95 年にかけて作家は複数の詩を雑誌に寄稿している。それらを収録した詩集 *War Is Kind* が 1899 年に刊行される（Wertheim & Sorrentino, *Log* 114-15, 138, 141）。詩集の表題は、1895 年 12 月頃に創作された“War is kind.”の一行を含む詩に由来する（10: 208）。*M* の改訂と *GM* の執筆に時期的に連続する。この詩集から両作品を貫く作家の意図の本質を逆照射できると期待される。詩集の表紙に着目する。*M* における Tommie の「柩」に直結する「柩の蓋」（coffin-lid）が描き込まれる。「骨壺」（urn）に相通じる「（装飾品としての用途を有する）甕」（urn）が一画を飾る（Stallman 31; Weatherford 232）。収録されている詩の 1 つには「火」（fire）と「死」（death）の両方が登場するものの、その組み合わせは詩中で＜アラブ風のイメージ＞を喚起する役割のみを担う（10: 51）。おまけに、詩集全体の主題とも「火葬」は相容れない。しかし、表紙は「死」、その先に続く「火葬」、を彷彿させる。[6] この詩集と、詩集刊行直後に執筆が開始された二作品、を並置して火葬／土葬を巡る作家の関心を更に掘り下げる。短編“The Trial, Execution, and Burial of Homer Phelps”は架空の田舎町の日常を描く。子ども同士の「遊び」（game）の中で、「墓（所）」（grave）に「土葬」（burial）される役回りを少年が固辞する（7: 210, 214）。土葬を巡る推進派と反対派の対立の構図が透ける。短編“The Upturned Face”は戦死兵を戦場で土葬する場面を描く。「土葬」（bury）し、「墓（所）」（grave）を作る必要に迫られるも、兵士たちは気が乗らない。死者の「腐敗」の進行を恐れる心地が土葬への逡巡を許さない。結果、避けられない「機械的な実務」（business）として＜ビジネスライク＞に徹した土葬作業が始まる。「土

が穴に落ちる音」（a sound-plop）の残響の余韻が残される（6: 297, 298, 300）。いずれも、遊び、戦場という次元での象徴的な「土葬」であり、現実世界からは乖離している。詩集の表紙、詩集とそれらの作品の連続性を勘案するならば、土葬という葬送の形が「ビジネス」として社会規範に深く根付いている事実、その可否を巡る議論が火葬の台頭と連動して大人たちの日常生活の枠をはみ出して子どもや兵士の世界にまで浸透している事実、が窺い知れる。*M* の執筆の際に表明された「見せる」意図を拡大して、作家は詩集の表紙の図柄越しに視覚的かつ文学的に「死」と「火葬」のイメージを読者に「見せ」付ける。意図のこの具現化はまた、火葬（と対を成す土葬）の持つ、私家版 *M* の献呈文中で言及される「強大な力」に匹敵する影響の力と作家の関係を如実に物語る。

19 世紀末米国（を代表するニューヨーク市）が万博に沸く。並行して、火葬／土葬を巡る論議が白熱する。この状況を作家は直接的、間接的に意識していたと言える。その上で、作品における不自然さが付きまとう死の諸風景は、中産階級米国人にツーリズム（リスト）の枠内で、秩序立てて安全な高みから「見せる」作家の振る舞いに合致する。万博の開催期間中に *RB* は書き進められる。*RB* の中に同じ視線のベクトルを埋め込んだ筈である。以上を踏まえ、火葬／土葬の趨勢を取り巻く当時の社会文化状況と紐付け、*RB* と“Veteran”の関係を再考する。

3. 火葬／土葬を巡る言説を介した *RB* と“Veteran”の繋がり

“Veteran”を発表した後、作家は 1897 年頃の手紙で、“[I]have never been in a battle, but I believe that I got my sense of the rage of conflict on the football field [. . .] .”、と書き記す（Wertheim & Sorrentino, *Correspondence* 322）。*RB* は戦争体験を持たない作家の想像の産物で、退役軍人たちによる「南北戦争回想記」を下敷きにする（Hungerford 529; Wertheim & Sorrentino, *Log* 89）。この手紙と同じ年、南北戦争を特集した著作が刊行される。「ツーリストに有益な情報」（Useful Information for [. . .] Tourists）を提供する意図、が副題に明示される。著作は（南北戦争の有名な激戦地）ゲティスバーグとニューヨークを繋ぐ鉄道路線を紹介し、「最も望ましい周遊路線」（most desirable line of travel）と読者に喧伝する（Minnigh 33）。南北戦争（の史跡）が 19 世紀末米国のツーリズム（リスト）の舞台になる。*RB* において Fleming は、「ギリシア的」（Greeklike）、「ホメロス的」（Homeric）な戦闘を実際に「目撃」（witnessing）しようと目論んで北軍に志願する（2: 5）。米国在住の彼から見ると、ギリシア／ホメロスは時間的空間的に遠い対象である。ツーリズム（リスト）的な動機が彼を南北戦争参戦に誘う。行軍（第 1 章）、戦闘、行軍（最終章）という所属する連隊単位で、入隊（第 1 章）、逃亡（第 6 章）、帰還（第 13 章）という個人単位で、遂行される動作を経て二重に（往復運動の軌跡を描く）ツアーと相似の円環構造が現出する。1896 年の書評は、“The reader sees the battle, not from afar, but from the inside.”、と *RB* を分析する（Weatherford 104-

05）。作中で呈示される戦場の様子、展開される戦闘の場面、を読者は Fleming の目線で追体験する。“Veteran” にも同様の仕掛けが施される。「退役軍人」（veteran）となった老 Fleming は戦争体験を食料雑貨店で店主と客に向けて語る。（本作品の読者に繋がる）聞き手（＝食料雑貨店の店主と客）は南北戦争を *RB* に引き続き追体験する（6: 82-83）。円環の構造（＝ツーリズム構造）が埋め込まれた、読者が南北戦争を「視覚」体験する装置として *RB* の表層の物語は作用する。

RB は新聞連載を経て 1895 年に単行本として刊行される。その翌年、ニューヨーク市中のスラム街を取り上げる *M* の改訂版が出版される。同市を拠点とする Appleton 社が両作品出版の業務を請け負う（Wertheim & Sorrentino, *Log* 141, 163）。よって同市在住の中産階級米国人が *RB* の最も近しい読者として想定され得る。“The newspapers, the gossip of the village, his own picturings, had aroused him to an uncheckable degree. Almost every day the newspaper printed accounts of a decisive victory.”、と「新聞」報道が Fleming を後押しする。彼の母親は「田舎」（the farm, village）を戦場の真反対に置く。“A newspaper, folded up, lay in the dirt.”、“[Fleming]wished to launch a joke–a quotation from newspapers.”、と戦場には「新聞」が折りたたんで置かれる。新聞に絶えず意識が向かう（2: 6, 50, 89）。1890 年代、ニューヨーク市の大手新聞社間での売り上げ競争がくり広げられ、「イエロージャーナリズム」（yellow journalism）の台頭で頂点に達する（Schlereth 185）。入隊後、「ニューヨーク第 304 連隊」（Th’ 304th N’York）に彼は所属する。戦場を転々とする際、“four hours”、“the early hours”、“in less’n an hour”、“in a weak hour”、“ensuing twenty-four hours”、“’bout an hour”、“not more’n fifteen minutes ago”、“about five minutes”、“[hold]on a minute”、“about ten minutes”、“for some minutes”、“in five minutes”、“for a period of minutes”、“delightful minutes”、と絶えず「時間」（hours, minutes）が彼と戦場を包囲する（2: 29, 56, 79, 81, 85, 86, 93, 98, 99, 101, 123, 134）。新聞、連隊の名称、時間（に対する強迫観念に似た）感覚、田舎と戦場の対置、が窺える。この戦場は、都市（＝新聞が情報を運び、時間が支配する、田舎と真逆の生活環境を提供する 19 世紀末のニューヨーク市）の鏡像になっている。Fleming 越しに、戦場の彼岸に、1890 年代の米国の都市部の様相が透ける。*RB* と “Veteran” には、19 世紀末の南北戦争関連著作に寄りかかり、それと連動する複層的なツーリズム（リスト）構造が内在する。老 Fleming による「南北戦争の昔語」という設定はその複層性の片鱗を覗かせる。この見地に立ち、1860 年代に遡る南北戦争を扱う裏で、1890 年代の米国の都市部、特に執筆中に作家の関心をより引き付けた筈のニューヨーク市、における火葬／土葬に関する問題系を *RB* は意識していると見る。そして、“Veteran” をこの文脈内で *RB* と組み合わせて考察する。

RB の特徴は＜匿名性の高さ＞にある。累々と横たわる数多の無名の戦死者を後景に、Fleming が初陣で恐怖の余り戦線逃亡する場面、連隊に復帰した後の戦闘で奮闘し自軍の勝利に貢献した英雄として賞賛される場面、の心象描写に作品の眼目は置かれる。彼の行軍の軌跡を具体的に辿ることはできない。各戦闘の名称は略され、場所と日時にまつわる情報も開示されな

い（Hungerford 520）。[7] フルネーム（＝ Henry Fleming）は作中で 1 回しか使われない。「若い兵卒」（a youthful private）、あるいは「若者」（the youth, a young feller）、と専ら言い表される（2: 4, 5, 7, 68）。1896 年の書評は、「印象」（impression）を読者に与える意図を *RB* が有していると見る（Weatherford 131）。彼の名前は意味を失う。代わりに、「若さ」が強調される。「若さ」は逆説的に、それと対になる「老い」と「死（と死者への処置）」を喚起する。副題「米国の内戦を切り取った逸話」（An Episode of the American Civil War）から派生する、南北戦争の枠を越えた 19 世紀末米国的な火葬／土葬の覇権争い（内戦）に繋がる「戦闘」（battle）全般へ *RB* の物語世界は拡大される（Cobb 161）。若さの対極にある＜老＞ Fleming を中心に置く“Veteran”がこれを裏付ける。“old dismal belfry”、“old Henry”、“old man's”、“old Fleming”、“old man”、“old Si Conklin's son”、“old lady”、“old grey wall”、“old machine”、“old mare's”、“old bell”、“old barn”、と（時間の経過を仄めかす）「老い」（old）が“Veteran”の物語世界を取り囲み、最終的に老 Fleming は死を迎える（6: 82, 83, 84, 85, 86）。

作中で現前化される死の風景は、若さ／老いの二項対立と絡まり合い、読者の「印象」形成に大いに寄与した筈である。*RB* の中で、“An' I'd break th'feller's neck if he was as big as a church.”、と不当な評価付けをした上官に向かって Fleming の戦友は憤る（2: 119）。「教会」（church）が「強大な敵」の比喩として読者に印象付けられる。この「教会」の持つ意味合いを検討する。プロテスタント教会の聖職者の家に生まれた作家はキリスト教的背景と無縁ではない（Wertheim & Sorrentino, *Log* 1）。事実、*RB* はキリスト教的要素を含む（Benfey 112）。最終稿からは削除されるも、出征する間際に「聖書」（bible）を手渡され、その教えに従うよう母親から Fleming は念を押される。一方で、彼は「ギリシア」、「ホメロス」に執着する。戦場における自身を、“He had fought like a pagan who defends his religion”、と振り返る（2: 5, 97, 148）。非キリスト教的な宗教観を固持する「異教徒」（pagan）に自己をなぞらえる。彼の一連の素振りは、付帯するツーリズム（リスト）の文脈で、時間空間的＜遠方＞に位置する対象を喚起するだけに留まらない。実際、キリスト教／非キリスト教性の間の揺れ、を読者（＝キリスト教徒）の前に彼我の距離を保ちつつ喚起する。関連して、（*RB* 刊行の前年に当たる）1894 年に米国で「ホメロス」についての入門書が刊行される。同書は、“The Homeric Greeks burn their dead.”、“In practising cremation, the Homeric Greeks were in accord with the most ancient practice of the Indo-European peoples, except the Persians.”、と「ホメロス時代のギリシア人たち」（Homeric Greeks）による「火葬」（cremation）実践に言及する（Jebb 71）。19 世紀末米国では、「（キリスト教の）聖書の教義に反する」（unscriptural）として火葬は否定された（*Cremation by an Eyewitness* 14）。1893 年の万博は、米国の文明の進歩発展を内外に示すと共に、欧州の「キリスト教国家」（nations of Christendom）から分化した、と米国の起源にキリスト教を置く（Davis 306）。作家と読者双方が拠り所とするキリスト教的価値観、その先に位置する、万博が体現する米国の文明誇示、これらと交差させ、火葬／土葬に対する問

題意識を *RB* の物語の内奥から抽出する。合わせて、*RB* と“Veteran”の連続性の本質を示す。

RB の中で、Fleming の連隊に Jim Conklin という兵卒が所属する。老 Fleming は“Veteran”の中で彼を回顧する（6: 83）。両作品を Fleming と Conklin が繋ぎ、両物語は互いに重なりつつ紡がれる。「学校」（seminary）に通い（古代ギリシアで活躍した）ホメロスに関する＜知識＞を備える、Fleming と対等の＜教養人＞として描かれる Conklin の人物像はニューヨーク市在住の読者に合致する（2: 5, 8）。更に、頭文字 JC は彼を Jesus Christ と象徴的に同化させる（Sorrentino 68）。この前提で、両名が戦場で再会する場面を読み返す。戦線逃亡後、Fleming は森を彷徨い、兵士の骸に邂逅する。それは腐敗が進み、「モノ」（a thing）として知覚される。戦場から隔絶し「教会」（chapel）に擬される森の一画に＜埋もれ＞て、土に還る途上にある。象徴的な土葬状態に置かれる。この印象を抱え、負傷兵の列に彼は行き当たり、致命傷を負った Conklin と Fleming は合流する。“It increased in violence until it was as if an animal was within and was kicking and tumbling furiously to be free.”、と彼の脳裏に纏わり付く、兵士の死体＝「モノ」と見る先の印象に通底する「獣」（animal）イメージで、Conklin は語られる（2: 47, 54, 57）。彼は Conklin の生命が獣に近似するモノ扱いされたまま尽きる様子を、“They began to have thoughts of a solemn ceremony.”、と「儀礼」（ceremony）と関連付けて見守る。実際上の葬送の儀式は行われない。負傷兵の列から落伍し草原に埋没する。先般の兵士と同じく（自然が作り出す教会に隣接する大地に）象徴的に＜儀礼＞に則り土葬される。“[The regiment]enclosed him [Fleming]. And there were iron laws of tradition and law on four sides.”、と「連隊」（regiment）（という名を借りた＜教養人の集団＞）の中で遵守されるべき「伝統という法」（laws of tradition）の下に Fleming は置かれる。この「法」は中産階級米国人に求められる「礼儀作法」全般に相当する。それと Conklin の土葬は表裏一体を成す。彼の死を見届けて、Fleming は連隊に帰還する。仲間の兵士たちは疲弊し地面に横たわる。身動きせず眠る彼らの様子は、“His disordered mind interpreted the hall of the forest as a charnel place. He believed for an instant that he was in the house of the dead and he did not dare to move lest these corpses start up, squalling and squawking.”、と「死体置き場」（the house of the dead）に類する「納骨堂」（a charnel place）内にいると Fleming に思い違いをさせる（2: 23, 47, 54, 57, 80）。

Christ と同一視される Conklin は実際、「モノ」扱いのまま比喩的に土葬される。対して、Fleming は自らを非キリスト教徒に準じる「異教徒」と見る。Conklin と異なり、彼は南北戦争の戦場から生還する。比喩形象の中で用いられる「納骨堂」は「新しく死者を土葬する区画を確保するために、墓堀人によって古い墓（所）から掘り出された人骨を保管する場所」を指す。（排泄物等から漂う悪臭の中にコレラの病原を見出した時代に）納骨堂から発せられる「臭気」（odors）に代表される環境の劣悪さが、土葬の欠点の 1 つとされる。土葬支持者からも改善を求める声が上がる（Cleaveland 42-43; Guilbert 212; ホイ 110）。[8] この種の苦情の彼岸に、土地不足でも実施が可能な、死者への「新しい」処置である火葬の容認が見据えられる。*RB* は Fleming

の目を通し、南軍の戦死者の顔を“ashen face”、と「灰」(ash) という表現で呼び表す。灰はその色のイメージと合わせて、死者に付随することで「火葬（の実施)」を想起させる。[9] また、“He became aware that the furnace roar of the battle was growing louder.”、と「(火葬) 炉」の比喩で Fleming は戦場を語る (2: 24, 63)。都市部のスラム街と戦場がこれらの連想と比喩を通じて重なる。19 世紀末米国で、(火葬) 炉の構造は放出される「煙」(smoke) の有無に関する但し書きを伴い中産階級米国人に説明される。その際、(火葬) 炉の「煙突」(chimney) 部分が彼らの耳目を集める (Erichsen 152-53)。*RB* の執筆と併行して構想された *GM* は、“[George's mother] looked out at chimneys growing thickly on the roofs.”、“The window disclosed a fair, soft sky, like blue enamel, and a fringe of chimneys and roofs, resplendent here and there.”、とスラム街の風景から、物語展開と無縁の「煙突」(chimneys) を切り取る。それを反復的に前景化し読者に印象付ける (1: 120, 178; Wertheim & Sorrentino, *Log* 88)。“When the roof fell in, a great funnel of smoke swarmed toward the sky [. . .]. The smoke was tinted rose-hue from the flames [. . .].”、と＜見えない＞煙突を象徴的に可視化させる「煙」(smoke) を通して老 Fleming の最期を描いて“Veteran”の物語は閉じる (6: 86)。彼の死の前後の物語設定を、*RB* における Conklin の死と関連付けて読み返す。

“Veteran”の中で老 Fleming は南北戦争を追想する。Conklin が戦死した後の、連隊の勝利に Fleming が貢献する逸話、戦友 Wilson と共に多数の死線を切り抜ける逸話、は語られない。代わりに、*RB* の本筋から見ても早々に戦死して Wilson よりも登場回数が遥かに少ない Conklin に、“[T]here was young Jim Conklin [. . .].”、と過去時制で、更に“none of you recollect him [Conklin]”、と説明付きで、(読者の立場に連なる) 作中の聞き手の注意が集中する (6: 83)。これは一見不自然に思われる。ところが、1896 年の書評に定位される、*RB* の「続編」という作品の位置付けを読者が了解しているという前提で眺め返すならば、ここで Conklin は過去時制を伴い、「(“Veteran”の時点で既に) 過去の存在＝死者」としてのイメージを (*RB* を読了した) “Veteran”の読者の間に再活性化させる役目を果たす、と言える (Weatherford 191)。冒頭部と結末部、老 Fleming が生活を送る田園の風景に「教会」(church) が顕在化する (6: 82, 86)。物語世界を教会が包む。彼の生活空間とキリスト教的要素の癒着が暗示される。加えて、教会は「葬式」を連想させる (Houghton et al. 353, 355)。このようにお膳立てされ、彼は (家畜小屋の) 炎に包まれて生涯を終える。表面的には、家畜の救出作業中の焼死として片付けられ得る。しかし、小屋の戸口に転がる「ランタン」に出火の原因が仄めかされるものの、確信に近い憶測に留まり特定はされない。むしろ、「火」それ自体と「火の中に立ち入る行為」が焦点化される。実年齢は問題ではない。彼が象徴する「老い」(old)、その先に待ち受ける「死」がその行為と共に見透かされる。小屋に飛び込む直前、彼の顔は“a grey thing”に変化する。彼は、比喩的かつ予言的に「灰」(grey ＝ ash) と一体化する。小屋の内部が焼ける音は、“a hymn of wonderful ferocity”と「讃美歌」(hymn) として知覚される。ニューヨーク湾内のスィンバーン島で稼働中の火葬炉と対になった「死を

悼む讃美歌」（death hymn）に通じる（6: 84; 8: 323）。1894 年の火葬特集雑誌は同時代の米国の著述家の一節を引き、“[T]he spirit ascended in vapor to the heaven out of which it came.”、と「古代ローマ」時代の火葬風景を説明する。続けて、“All hail the dawn of a newer and higher civilization, which shall substitute the cleanliness and simplicity of cremation for the complicated and dreadful horrors of burial!”、と火葬の利点を説く（Brown 7）。老 Fleming の「魂」は炎と混交し煙に擬態する。可視化され「空へ向かって上昇」する（6: 86）。この描写に、「（古代ローマ時代の）火葬」と「魂の上昇」のイメージは重複する。連結して、米国社会に「より新しくより高次な文明」（a newer and higher civilization）をもたらすと期待される。戦場で発揮される Fleming の蛮勇は、彼に備わる「異教徒性」（pagan）と「獣性」（barbarian, beast, animal）を *RB* の中で暴露した（2: 97, 135）。同様の「獣性」を帯び、モノ扱いされ象徴的に土葬される Conklin を回想し、彼と擬似的に同体化した上で老 Fleming は火葬に付される、と“Veteran”の結末部は読み解かれ得る。

スラム街で頻発する火事、伝染病の流行、それに伴う死亡事例は無秩序状態を現出させる。土地開発に伴い土葬実践に限界が迫る。米国の文明性を焼却行為と融合させ、火（事）は火葬という秩序立った型に嵌め直される。合わせて、コレラ（＝非文明性）がもたらす脅威は無害化される。この戦略を通じ、万博は中産階級米国人の優越性を再強化し、彼らを取り巻く世界秩序の復元を目論む。RB を通して、匿名性が強調される Fleming は中産階級米国人の＜代表者＞としての使命を負う。彼の身体は万博と共振する。前文明的と当時みなされた（移民を含め、そこから派生した）諸々のモノを文明の火により昇華させる手段としての仮想的な火葬行為を自らに施す。「全知全能の神」（mighty spirit）に近しい高位の存在として再生され、再文明化される。“The smoke was tinted rose-hue from the flames, and perhaps the unutterable midnights of the universe will have no power to daunt the color of this soul.”、と「真夜中」（midnights）が導く＜暗がり＝未開＝無教養＞の等式を、火葬に付された死者（＝老 Fleming）の「魂の色」（the color of this soul）が圧倒する（6: 86）。炎の中に入る（＝炎と一体化する）彼の姿は、「英雄的行為」（heroism）に連なる。Conklin の死をキリスト教的価値観に沿う＜適切＞な形で回収しつつ、＜光＝文明＝教養＞と＜英雄＞の連関を、死（視）の位相で示す一文で作品は幕を下ろす。

作中に（火葬）炉は出て来ない、火葬という表現も使用されない、あくまで火事による Fleming の焼「死」事案が扱われる。一方で反復的に、彼は「死」（death）と等価視される（6: 82, 86）。よって、当時の規範に従い、彼（の身体）は焼け落ちた家畜小屋から搬出されて土葬されたと読者は通例理解した筈である。しかしながら、真夜中の暗がりを切り裂いて煌々と「火」が浮かび上がる、その残像が闇夜の黒に映えて読者に強烈に刷り込まれる。風刺画の＜騙り＞によって逆説的に裏打ちされる＜火葬による完全な死の構図＞を反復する（“A ‘Bogus’ Cremation”）。19 世紀末米国的な都市を迂回し、南北戦争と田園の風景に、＜間接＞的かつ＜暗示＞的に老 Fleming の死の風景は溶け込む。火葬／土葬の言説、（万博、南北戦争史跡、古代ギ

リシア、古代ローマ、スラム街、エジプト、等々を対象とする）ツーリズム（リスト）の文脈、に還元される。この過程を完成させる際に欠かせない断片の 1 つとして、“Veteran” は *RB* と相互に関係し合う。*RB* の蛇足ではない。作家（と作品）を理解するための＜重要＞な手掛かりになり得る。

お　わ　り　に

GM では、“Th’ last time I remember she was as spry as a little ol’cricket, an’was helpeltin’aroun’the’ country lecturin’before W.C.T.U.’s an’one thing an’another.”、と「婦人キリスト教禁酒同盟」（W.C.T.U.）における George の母親の活動歴が明かされる（1: 118）。作品発表の 8 年前、1888 年 6 月、Crane の母親はかねてから親交があった婦人キリスト教禁酒同盟の会長 Frances Willard を自宅に招く。同じ年の 6 月 19 日から夏季休暇を利用して当時在籍中のクラヴェラック・カレッジから帰省していた Crane が彼女と面会した可能性は高い（Wertheim & Sorrentino *Log*, 43）。George の母親を造形する際、作家はこの女性を手本にしたと推察される。火葬推進派による 1892 年の著作は Willard の見解を援用し、「進歩的運動」（progressive movements）における火葬の有用性を訴える（Cobb 169）。小論で展開して来た議論を補完する形で、伝記的にも、火葬／土葬を取り巻く同時代の米国の社会状況と陸続きである作家の立ち位置が浮かび上がる。

1896 年の書評は、“Crane aims to throw some light in these two books. He offers no solution; he does not even state the problem. He simply turns on the light[. . .].”、と *M* と *GM* を例にして「敢えて答えを示さない」作家の姿勢を指摘する（Weatherford 171）。関連して、1897 年頃の作家の手紙は *RB* に対する私見を連ねた後で、“I let the reader find it[any moral or lesson]for himself.”、と作品に対する道徳判断を読者に任せる（Wertheim & Sorrentino *Correspondence*, 323）。これらの事項から導かれる作家の本質を理解する補助線として、当時の文壇の大御所 William Dean Howells との対談を 1894 年に新聞記事化した Crane の小編 “Howells Fears the Realists Must Wait” に注目する。“The novel, in its real meaning, adjusts the proportions. It preserves the balances.”、と「釣り合い」（proportion, balance）の感覚が小説の重要な要素として掲げられる（8: 637）。火葬／土葬の議論を善悪二元論で片付けはしない。作家はむしろ読者の主体性を認め、議論の帰着点を彼らに委ねる。彼らのツーリスト的立ち位置、彼らの優越性は担保される。

19 世紀末米国（とりわけニューヨーク市）が直面する社会文化状況、「移民」、「死」、「時計（時間）」、「万博」、「墓（所）」を取り巻く状況、の同一線上に「ツーリズム（リスト）」の軸と交差させて作家（の作品と身体）を再定位する妥当性、それに基づく既成の作家像の再構築の可能性、が示された。勿論、問題系を見渡し易くするために作家（の作品）の持つ複層性を単純化し特定の事象を恣意的に拾遺した誹りは免れない。しかし、それらは連結し、当時の米国を取り巻

く新旧勢力の受け皿となる諸言説と作家の間の緊密な関係を導出する。従来的な Crane 研究の間隙を確実に縫い、作家（の作品）研究の地平に新たな展開を切り拓く一助として期待される。作家は様々な死の形を＜見＞せられ、かつ、抗い難くそれに＜魅＞せられる。詩集の表紙に嗜好（思考）の一端が偲ばれる。死後、作家（の身体）は滞在先の欧州から母国である米国へ至る復路の旅程を死者として辿り、当時の米国で主流の型通り「土葬」される。作家（の身体）はツーリズム（リスト）に準じる（あるいは殉じる）。同時代の葬送論争にジャーナリストとして接しながら、死者への適切な処置の形を作家は自作品を通して想像／創造する。その上で、読者に火葬が秘める可能性を呈示する。反面、作家（の身体）は火葬の代わりに土葬を選択する。葬送の規範として土葬実践が再生産される。この＜捩れ＞にこそ 19 世紀末米国において時期尚早として一本化され得ない、一本化することが躊躇される葬送手段、その先に控える死（視）の風景の実相、が集約されていたに相違ない。

注

1　米国建国以来の主流派を自認する「ワスプ」（WASP = White Anglo-Saxon Protestant）に連なる（と自己認識する）人々を「中産階級米国人」と呼び、19 世紀末に米国社会に新規参入した「移民」たちと対照させて用いる（越智 5）。Crane 作品については、ヴァージニア大学出版『Stephen Crane 全集（全 10 巻）』を使用した。巻数と項数を括弧内に記す。なお、引用文中の下線は全て筆者による。

2　筆者は 2014 年、2016 年、2017 年の論考で違う角度から、19 世紀末米国におけるツーリズム（リスト）と Crane（の作品）の関係性を考察している（天理大学アメリカス学会編 158-75; 増崎「『アフリカ』から読む Stephen Crane」23-40; 増崎「19 世紀末米国における円環の構図」1-19）。各論考で得られた研究成果を、死（視）と Crane（の作品）の相関性を探る手掛かりとして小論で援用する。

3　一次資料として取り上げる雑誌、著作、新聞記事は全て、中産階級米国人を読者（読者層として想定されている）とする。なお、19 世紀末という時代に生じた「死」に対する大衆の関心醸成のメカニズム、それを促す社会文化的背景、を高山宏は総合的に論じている（278-32）。

4　筆者は 2002 年の論考で、19 世紀末米国におけるコレラの大流行、連動するコレラ恐怖の言説を抽出し、移民と中産階級米国人の覇権争いと絡めて Crane（の作品）を再考している（増崎「スラムを囲い込み無害化する」13-23）。この研究成果を踏まえて、コレラ、火葬、Crane（の作品）の三者の連続性を小論では考究する。

5　1897 年の中編 “The Open Boat” の中で、作家は海上漂流する救命ボートの乗組員たちを「ミイラ」（mummies）に喩える（5: 87）。「エジプト」と「ミイラ」が作家の意識下で万博以来、堅く結合していたと想像される。

6　1890 年代の米国における火葬推進派寄りの雑誌の 1 つに *The Urn* がある。この雑誌名は「灰」（ash）を入れる「骨壺」（urn）を火葬と結び付ける当時の思考様式を示唆する。詩集の表紙に柩と共に採用される骨壺は作家の火葬肯定の証左と見ることも可能である。

7　老 Fleming による語り越しに “Veteran” の中で、*RB* は「チャンセラーズヴィル」（Chancellorsville）の戦いを取り上げていると明かされる（6: 83）。

8　19 世紀末的な「納骨堂」の意味に関しては、1896 年の英国系百科事典 *Chambers Encyclopedia* を参照した（“Charnel-house”）。*RB* の中で比喩的に現れる「納骨堂」もこれに準じると推定される。

9　*RB* における色彩語の使用を押谷善一郎は網羅的に研究し、Crane の印象主義的技法という観点から作家（の作品）を再読している（押谷 210-56）。

引用文献

Benfey, Christopher. *The Double Life of Stephen Crane*. NY: Alfred A. Knopf, 1992.

Bierce, Ambrose. *The Unabridged Devil's Dictionary*. Ed. David E. Schultz and S. T. Joshi. Athens: U of Georgia P, 2000.

"A 'Bogus' Cremation for the Benefit of the 'Life-Long Democrats.' " Cartoon. *Puck* 18 (1885): Centerfold.

Brown, Don. "Islands in a Sea of Reading." *The Urn* 3.6 (1894): 7.

The Cemeteries of New York, and How to Reach Them. NY, 1881.

"Charnel-house." *Chamber's Encyclopedia: A Dictionary of Universal Knowledge*. New edition. 1896.

Cleaveland, Nehemiah. *Greenwood Illustrated*. NY, 1847.

Cobb, Augustus G. *Earth-Burial and Cremation: The History of Earth-Burial with Its Attendant Evils, and the Advantages Offered by Cremation*. NY: G. P. Putnam's Sons, 1892.

Crane, Stephen. *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Ed. Fredson Bowers. 10 vols. Charlottesville: UP of Virginia, 1969-76.

Cremation by an Eyewitness. NY: A. S. Barnes, 1880.

"The Crematorium at Lancaster, Pa." *The Manufacturer and Builder* 18 (1886): 186.

Davis, George R. "The World's Columbian Exposition." *North American Review* 154 (1892): 305-18.

Don't Fail to Visit the Egyptological Exhibit. Advertisement. 1893.

"Employés' Time Recorder." *The Manufacturer and Builder* 26 (1894): 171.

Erichsen, Hugo. *The Cremation of the Dead Considered from an Aesthetic, Sanitary, Religious, Historical, Medico-legal, and Economical Standpoint*. Detroit: D. O. Haynes, 1887.

Flinn, John J. *The Standard Guide to Chicago*. Chicago: The Standard Guide Co, 1893.

Guilbert, Edward A. "Cremation or Earth Burial, Which?" *Public Health: Papers and Reports* 21 (1896): 201-16.

Gullason, Thomas A. "The Sources of Stephen Crane's *Maggie*." *Philological Quarterly* 38 (1959): 497-502.

Henderson, Howard. *Cremation: Rational Method of Disposing of the Dead*. Cincinnati, 1890.

Houghton, Walter R., et al. *Rules of Etiquette and Home Culture; or What to Do and How to Do It*. 25th ed. NY, 1893.

Hungerford, Harold R. " 'That Was at Chancellorsville': The Factual Framework of *The Red Badge of Courage*." *American Literature* 34 (1963): 520-31.

Jebb, R. C. *Homer: An Introduction to the Iliad and the Odyssey*. Boston, 1894.

Jenkins, William T. "Quarantine at New York." *North American Review* 155 (1892): 585-91.

Knapp, Bettina L. *Stephen Crane*. NY: Ungar, 1987.

Mayo-Smith, Richmond. *Emigration and Immigration: A Study in Social Science*. NY: Charles Scribner's Sons, 1890.

"Mind Your Own Business." *The Urn* 3.2 (1894): 1-2.

Minnigh, Luther W. *The Gettysburg Knapsacks: A Souvenir of Useful Information for Veterans, Patriots, Tourists, and the Great Army of Generous Youth, in Whose Souls the Stirring Reminiscences of the Battle of Gettysburg Find a Place*. Mt. Holly Springs, 1897.

Morse, W. F. "Disposal of Waste at the World's Columbian Exposition." *Science* 22 (1893): 316-17.

"Practical Hints." *The Urn* 3.5 (1894): 1-2.

Prothero, Stephen. *Purified by Fire: A History of Cremation in America*. Berkeley: U of California P, 2001.

"Punctuality." *The Manufacturer and Builder* 5 (1873): 46.

Reaney, Percy H. *A Dictionary of English Surnames*. NY: Oxford UP, 2005.

Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: A Study among the Tenements of New York*. NY: Charles Scribner's Sons, 1890.

Rosen, Fred. *Cremation in America*. Amherst: Prometheus, 2004.

Schlereth, Schlereth, Thomas J. *Victorian America: Transformations in Everyday Life*, 1876-1915. NY: HarperCollins,

1992.
Solomon, Eric. *Stephen Crane: From Parody to Realism*. Cambridge: Harvard UP, 1966.
Sorrentino, Paul M. *Student Companion to Stephen Crane*. Westport: Greenwood, 2006.
Stallman, R. W. *Stephen Crane: A Critical Bibliography*. Iowa State UP, 1972.
Stoddard, John L. *Egypt*. Chicago, 1897.
Weatherford, Richard, ed. *Stephen Crane: The Critical Heritage*. Boston: Routledge and Kegan Paul, 1973.
Wertheim, Stanley, and Paul Sorrentino, eds. *The Correspondence of Stephen Crane*. 2 vols. NY: Columbia UP, 1988.
—. *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane, 1871-1900*. NY: G.K. Hall, 1994.
Wilson, Latimer J. *My Trip to New York: Notes and Impressions*. NY: F. M. Buckles, 1906.
アーリ、ジョン＆ヨーナス・ラースン『観光のまなざし』増補改訂版　加太宏邦訳　東京：法政大学出版局、2014。
押谷善一郎『スティーヴン・クレインの眼』大阪：大阪教育図書、1995。
越智道雄『ワスプ（WASP）―アメリカン・エリートはどうつくられるか』東京：中央公論社、1998。
高山宏『目の中の劇場』東京：青土社、1985。
天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし―再魔術化される観光―』奈良：天理大学出版部、2014。
ホイ、スーエレン『清潔文化の誕生』　椎名美智訳　東京：紀伊国屋書店　1999。
増崎恒「『アフリカ』から読む Stephen Crane ―19 世紀末米国におけるツーリズム（リスト）とスラム街―」『追手門学院大学国際教養学部紀要』9（2016）: 23-40。
―「19 世紀末米国における円環の構図―Stephen Crane、ツーリズム（リスト）、（車）輪の力学」『追手門学院大学国際教養学部紀要』10（2017）: 1-19。
―「スラムを囲い込み無害化する―19 世紀末コレラ恐怖と Stephen Crane のスラム表象」『中・四国アメリカ文学研究』38（2002）: 13-23。